

## 『哲学探究』の治療における対話形式の意義

——なぜワイトゲンシュタインは「噛み合わない対話」を見せるのか？

楨野沙央理

## 一章、『哲学探究』の治療と対話形式

『哲学探究』(二〇〇九、以下『探究』)をはじめとする後期ワイトゲンシュタインの遺稿は、一定数の研究者 (cf. Baker 2004, Kussela 2008) により、「治療」(PU §133) を行うものとみなされてきた。「治療」が何を意味するかは個々の研究者によって異なるが、ある程度共有されている前提は、次のようなものである。第一に、治療は、「哲学的理論」と評されるような特徴をもたない。治療は、より少ない原理でより多くの言語活動を説明する体系ではない。第二に、治療が取り扱う「哲学的病」(PU §393) とは、言語のあり方を把握する際に、単純な枠組みをその適切な範囲を超えて適用したり、誤ったアナロジーを用いたりすることによって生じる混乱のことである。つまりワイトゲンシュタインの治療活動は、哲

学的病に犯された状態の人に対し、そこから脱出するための具体的なヒントを提示するものである。

『探究』は、対話形式によって書かれている。そこには、会話をリードする人物と、その対話者が登場する。大雑把にとらえれば、会話をリードする人物は、治療者としてのワイトゲンシュタインであり、対話者は、哲学的病に犯された過去のワイトゲンシュタイン等々の立場を担うと言えるかもしれない。両者の関係は、ライプニッツの『人間知性新論』におけるテオフィルとフィラレートのように、異なる哲学的立場をもつ者同士の関係というよりはむしろ、プラトンの対話篇に登場するソクラテスとテアイテトスのように、一方がもう一方を説得する関係に似ている。

しかしながら、ワイトゲンシュタインと対話者の関係はそれほど単純ではない。ワイトゲンシュタインは対話者と思考を共有するよ

うにみえる。また、ある発言がどちらの人物から発せられたものであるかを、常に確定できるかどうかわからない。二人の人物のあり方は、癒着している。『探究』の著者のウイトゲンシュタインの中に、二つのキャラクターが存在すると表現する方がよいだろう。

ウイトゲンシュタインと対話者の関係を複雑にしている理由の一つとして、両者のやりとりのあいだに、ほとんど和解が生じていない点が挙げられる。二人は衝突し、あるいは行き違う。対話者はウイトゲンシュタインに不満を訴え (cf. PU 86b)、ウイトゲンシュタインは対話者に苛立つ (cf. PU 830a)。また、読者から見ても、一方の発言とそれに対するもう一方の返答がどのように繋がっているかすぐに理解しがたい箇所も散見される。つまり、両者の対話は噛み合っていないのである。

噛み合わない対話をウイトゲンシュタインがわれわれに見せる理由は、何だろうか？ この問いに対する直接的で明確な回答は、まだ提出されていない。『探究』の対話がしばしば噛み合わないことは、容易に目につきやすいにも関わらず、これまで研究者によって積極的に論じられることはほとんどなかった。その背景として、そもそも『探究』の対話形式を中心的に取り扱う研究 (cf. Heal 1996)、自体がそれほど多くないことが挙げられる。もちろん、『探究』の対話形式はしばしば言及されてきたが、その場合でも、例えばウイトゲンシュタインとプラトーンソクラテスといった他の哲学

者との比較 (cf. Rowe 2007) においてなされるに過ぎなかった。

しかし、われわれの問いに回答するための方法はすでに示唆されている。対話者に関するこれまでの研究は、噛み合わない対話を説明するためのきっかけを与えてくれる。すなわち対話者は、何らかの偏った見方に陥っており、哲学的な「像」 (cf. Shanker 2004, Egan 2011, Ohtani 2016 / 大谷二〇一〇、二〇一四) を通じてしか言語を把握できなくなっていることが指摘されてきた。哲学的な「像」とは、大谷によると、具体的な使用を欠いた語のイメージのことである (cf. 大谷二〇一四、一四二―一四六頁)。哲学的な「像」を通じてのみ言語を捉えようとしてしまう対話者は、当然、ウイトゲンシュタインの促しをただちに受け入れることはできない。このことから、ウイトゲンシュタインと対話者のあいだで食い違いが生じることは回避できないと推測される。

こうした研究を踏まえ、われわれは次のような暫定的回答を導くことができる。すなわち、ウイトゲンシュタインが噛み合わない対話をわれわれに見せる理由は、治療の難しさを伝えようとしたからである。この回答は、われわれを一時的に満足させるかもしれないが、結局は不十分なものである。というのわれわれが知りたいのは、なぜウイトゲンシュタインが治療の難しさを公にしたのか、ということだからである。もしこれ以上の理由を考えることができないのであれば、「噛み合わない対話」は、ただ単に治療の過程で生

ずる障害を意味するものになってしまう。

噛み合わない対話がわれわれ読者にもたらす重要な意義を明らかに出すためには、われわれが対話者を取り扱う態度を見直さねばならない。これまでの研究では、主として、治療者としてのウイトゲンシュタインの立場からみた対話者のあり方が検討されてきた (cf. Finkstein 2000)。その一方で、対話者自身のパースペクティブはほとんど無視されてきたと言ってよい。しかしながら、すでに述べたように、対話者も、そして治療者としてのウイトゲンシュタインさえも、『探究』の著者ウイトゲンシュタインの一部である。治療活動の内実を明らかにするためには、われわれは治療者として登場するウイトゲンシュタインの見方だけでなく、対話者の見方にも寄り添わねばならない。

本稿は、対話者の反応に着目して治療過程を分析し、「噛み合わない対話をウイトゲンシュタインがわれわれに見せる理由」を考察する。これにより、後期ウイトゲンシュタインの治療活動の内実を明らかにするとともに、われわれ自身の思索に役立つような考察を展開したいと思う。以下の章では、次の順序で検討を行う。次章では、噛み合わない対話の具体例として『探究』一九一から一九五節をとりあげ、治療過程を分析する。三章では、対話者の反応の分析を通じてそのパースペクティブを構成し、それを踏まえて、噛み合わない対話の意義を考察する。四章では、噛み合わない対話がつ

意義を、われわれ『探究』の読者の観点から検討する。

## 二章、『探究』一九一—一九五節

本章では、『探究』の中から、ウイトゲンシュタインと対話者の会話が噛み合わない部分を含む一九一—一九五節をとりあげて分析する。この箇所は、「規則遵守論」として有名な一八五—二四二節の一部である。規則遵守論は、さまざまな要素を含む極めて複雑なパートであるが、ここでは簡潔に対話者の特徴に限って説明する。すなわち対話者は、「規則」の概念に確定された意味があると思っ  
ている。すなわち「規則」は、第一に、経験的事実から独立に成立し、われわれの実際の言語使用と一致したりしなかったりするものである。第二に、「規則」は、ある語のすべての適用の可能性を内包している何ものである。対話者は、この二つの意味で考えられた「規則」の概念を、いかに「把握」することができるかを問題にしようとしている。

実際に一九一・一九二節を参照しよう。鍵括弧内が対話者の発言である。

「われわれは、まるで一瞬のうちに、ある語のすべての使い方を把握できるみたいだ。——たとえば、どんなふう、——人は——ある意味では——一瞬のうちに把握できるのでない

か？——そして、どうい、意味で君にはできないのか？——まるでわれわれが、それをもっと直接的な意味で「一瞬のうちに把握」できるかのようだ。——しかし君は、それに合う範例 (Verbid) を持っているのかな？ いや、ない。私たちに提示されるのは、そういう表現の仕方だけなのだ。互いに交差する像の結果として。(PU S191、圏点強調は原文、以下同様。)

君はこの度を越えた事実の範例をもってはいないが、しかし超——表現を使うようにそそのかされているのだ。(人はこれを哲學的最上級と呼ぶことができる。)(PU S192)

ここでは対話者が、「われわれは、まるで一瞬のうちに、ある語のすべての使い方を把握できるみたいだ」と話し、それに対してウイトゲンシュタインが、「たとえば、どんなふう、に？」と問うている。われわれは普段、何かを一瞬で把握できることもあり、そうでないこともある。例えばある人は、ある数列が偶数列になっていることを一瞬で理解できるかもしれないが、ある数列がフィボナッチ数列になっていることを理解するには、時間がかかるかもしれない。ところが対話者が「一瞬のうちに「…」把握できる」と言うときは、先のように一瞬で把握できる場合とできない場合との具体例を挙げることができないように見える。ウイトゲンシュタインが、「それ

をもっと直接的な意味で「一瞬のうちに把握」できるかのようだ」(傍線強調は引用者)と指摘するのは、そのためである。

一九一・一九二節のポイントを、次のように言うことができよう。すなわち、対話者の「一瞬のうちに、ある語のすべての使い方を把握できる」という表現は、その表現を理解するために必要な具体例や、その表現がいつ用いられるのかという特定の状況——広い意味での「文脈」を欠いている (cf. Ohnari 2016)。

ウイトゲンシュタインの治療は診断だけで終わりではない。一九三・一九四節においてウイトゲンシュタインは、対話者の表現を直接批判するのではなく、対話者が自身の表現を見直すためのヒントとして、想像上の「機械」を提示する。

働き方のシンボルとしての機械。機械は——まず最初にこう言えるかもしれない——自分の働き方をすでに自分のなかにもっているように見える。ということはどういうことだろうか？——機械のことを知ると、ほかのすべてのことが、つまり機械がするだろう運動が、すっかり決定されているように見えるのだ。

われわれは、まるで機械のその部分はその部分になんか動かないかのように語る。それ以外のことはなにひとつできないかのように。これはどういうことだろうか？——機械が曲がったり、

折れたり、溶けたりする可能性を忘れていいのか？ たしかに。

私たちは、多くの場合、そんなことはまるで考えない。機械とか、機械の像は、一定の働き方のシンボルとして使われる。われわれは、たとえば誰かに機械の像を伝えるときには、その人が当然、その像から各部分の運動がどんなものかを、導きだすものと前提しているわけだ。[...] (PU §193)

「働き方のシンボルとしての機械」というイメージは、対話者がこだわっている哲学的な「規則」の概念のアナロジーであると考えられる。このイメージは、対話者に提供された一つの「比較対象」(PU §130)である。対話者は、想像上の「機械」と、哲学的な「規則」の概念とを比較することにより、その過程で、自身が「規則」という語で何を考えていたかについて気づきを得ることができ

る。いまわれわれは、対話者の代わりに比較を行ってみることにしよう。「機械は、自分の働き方をすでに自分のなかにもっているように見える」(PU §193) という表現に着目するならば、これは対話者の表現「われわれは、まるで一瞬のうちに、ある語のすべての使い方を把握できるみたいだ」(PU §191) と似ている。「機械」と「機械がするだろう運動」との関係は、「ある語」と「すべての使い方」との関係を、パラフレーズしたものに見える。このパラフレ

ズによって、二種類の表現の間に類似性が生じる。この類似性のもと、哲学的な「規則」の概念を捉え直すならば、そこで、ある語に備わった個々の使用を生み出す不思議な力のようなものが想定されていたことに気づく。

このようにしてわれわれは、ワイトゲンシュタインが提示する比較対象を活用し、ある概念の捉え方についての気づきを得ることができる。ワイトゲンシュタインは、対話者の表現がそれを理解するための文脈を欠いていることを指摘するだけでなく、対話者が自身の表現を見直すきっかけを与えている。

しかしながら、ワイトゲンシュタインの促しに対する対話者の反応は、われわれが期待するようなものではない。

「しかしぼくはね、ぼくがいま(把握するとき)やっていることが、将来の使い方を因果的に、そして経験的に決定する、とは思っていない。不思議なやり方でその使い方そのものが、何かある意味で目の前にある、と思っているんだ。[...] (PU §195)

われわれは、この一九五節の対話者の反応と、ワイトゲンシュタインが直前の一九四節で提示したものととの関連をすぐに理解することは難しい。一九四節を見てみよう。

さて、どういふときに、「機械はその可能な運動をすでに、なんらかの神秘的なやり方で自分のなかにもっている」と考えるのだろうか？——それは、哲学するときだ。では、われわれを惑わせてそのように考えさせるものは何だろうか？ それはわれわれが機械について語るときにやり方だ。たとえば私たちは、「機械はそういう運動の可能性をもっている、(所有している)」と言う。私たちは、これこれの運動だけがで、できる、理想的な硬さの機械のことを語る。——運動の可能性、これは何なのか？運動のことではないが、運動の単なる物理的条件でもなさそうだ。「…」むしろそれは、運動そのものの影のようなものであるはずだ。(PU §194)

ここでウイトゲンシュタインが語っていることは、対話者が危惧しているような話ではないように見える。すなわち、ある語のすべての使い方を一瞬のうちに「把握する」ことが、「将来の使い方を因果的に、そして経験的に決定する」(PU §195) ことであるかどうかには、あまり関係がないように見える。

むしろウイトゲンシュタインが示唆していることは、われわれがしばしば、ある表現方法につられて言葉が何か神秘的な働きをすると考えてしまうことがあるのではないか、ということである。「機

械はそういう運動の可能性をもっている」(PU §194) という表現は、ただ単に「機械はそういう運動をする」という表現とは異なり、何か「可能性」なるものの本体をどこかに備えているような感覚を抱かせる。これと似たようなしかたで、われわれも言語を捉えてしまうことはありうる。たとえばわれわれは、「規則」という言葉の背後にあって何か神秘的で捉えたい働きをするものが存在すると信じ込んでいるかもしれない。

一九五節の対話者の反応は、われわれが予想したようなものではない。それどころか、対話者の反応を一目見るだけでは、彼がウイトゲンシュタインの促しをどのように受け止めたのか察することはできない。次章では、対話者の反応を検討してみよう。

### 三章、対話者のパースペクティブと噛み合わない対話

本章では、一九五節の対話者の反応を検討し、彼のパースペクティブを構成した上で、噛み合わない対話の捉え直しを行う。まず、対話者はウイトゲンシュタインの促しをどのように受け止めたのだろうか。すでに確認したように、一九五節は、一見ただけでは直前の一九四節とのつながりが理解できないものである。われわれは、対話者が、一九三節と一九四節で展開された「働き方のシンボルとしての機械」をどのように受け止めたか、推測しなくてはならない。

すぐに指摘できることは、対話者がウイトゲンシュタインの促しを何らかの意味で拒絶しているということである。対話者は、自身が望まない発想を退け、自身の考えを述べ直している。

「しかしぼくはね、ぼくがいま(把握するときに)やっていることが、将来の使い方を因果的に、そして経験的に決定する、とは思っていない。不思議なやり方でその使い方そのものが、何かある意味で目の前にある、と思っているんだ。[...]」(PU 8196)

では、どのような意味で対話者はウイトゲンシュタインの促しを拒絶するのだろうか。対話者は、そもそも、「働き方のシンボルとしての機械」を、対話者の表現のアナロジーとして見ることができないのであるか。そうではなく、このことに気づいたうえで、アナロジーを拒否しているのだろうか。この問題は、正解を確認する方法がわからないため、回答することが難しいが、われわれはここで後者の可能性を選びたいと思う。その理由は、対話者の発言を、ウイトゲンシュタインのアナロジーによってもたらされた新しい気づきとして見るからである。

『探究』全体を見れば明らかのように、対話者は自身の考えを系統立てて述べてはいない。対話者は、ウイトゲンシュタインに触発

されながら自身の考えを表現する。一九五節の発言内容も同様であり、あらかじめ熟知していたことをただ単に述べているというよりも、ウイトゲンシュタインの促しに対する反応として述べられている。つまり、対話者の発言「しかしぼくはね、ぼくがいま(把握するときに)やっていることが、将来の使い方を因果的に、そして経験的に決定する、とは思っていない」は、ウイトゲンシュタインが提示したアナロジーに対する反応として発せられたものだと考えられるのである。

これらの推測が合理的であるならば、一九五節における対話者の「拒絶」は、アナロジーを見ることができない、ということではなく、「働き方のシンボルとしての機械」が、対話者の考えを「正確に」表現していないからだと考えられる。何が対話者の考えの正確な表現であるかは、そもそも正確な表現が本当に可能であるかも含め、大きな問題である。また、ウイトゲンシュタインのアナロジーはあくまで比較対象であって、そもそも対話者の考えを正確に反映するものではないという指摘もなされよう。ただここで確認しておきたいことは、少なくとも対話者にとって、ウイトゲンシュタインの機械のアナロジーを受け入れることは、何か自身にとって好ましくない発想を招くと感じられる、ということである。

われわれはここまでで、対話者のパースペクティブを構成した。

これをふまえ、改めて一九五節の噛み合わない対話を考察してみよう。すなわち、対話者はウイトゲンシュタインが提示する比較対象と自身の表現とのアナロジーに気づいており、拒絶の反応もアナロジーに対する反応の一つであるともみなのである。すると、これまではほとんど明らかでなかった噛み合わない対話の重要性が少しずつ明るみに出されてくる。

第一に、噛み合わない対話は、対話者にとってウイトゲンシュタインの促しが無益であることを意味するのではなく、むしろ、対話者が自身の表現の不明瞭さに気づく機会であることを意味する。機械のアナロジーのもとでは、対話者の「一瞬のうちに、ある語のすべての使い方を把握」(PU §19) するという表現は、対話者の意に反して、あたかも「将来の言葉の使い方が経験的に決まる」ということを意味するようになってしまう。もちろん「働き方のシンボルとしての機械」はあくまで比較対象として働くものであり、対話者の考えを完全に正確に反映したものではないだろう。しかし、両者のあいだに大筋においてアナロジーが認められることにより、対話者自身も気づかなかった、自身の表現の不明瞭さがあぶりだされるのである。

第二に、噛み合わない対話は、治療の進行を妨げる障害であるように見えたが、実は、対話者の表現を吟味する重要な機会であり、治療の来たるべき一過程である。再び一九五節の対話者の発言に着

目すれば、ウイトゲンシュタインのアナロジーを拒絶する際、対話者は同時に自分の考えを表現してもいる。対話者は、「しかしぼくはね、ぼくがいま(把握するときに)やっていることが、将来の使い方を因果的に、そして経験的に決定する、とは思っていない」(PU §26)と前置きした上で、「不思議なやり方でその使い方そのものが、何かある意味で目の前にある、と思っているんだ」(PU §29)と述べる。このとき対話者は、自身の考えをより「純粹に」表現しようとするように見える。

そして対話者が自身の考えの「純粹な」表現だと考えるものこそ、ウイトゲンシュタインが吟味しようとする当のものなのである。一九五節の続きを見てみよう。そこでウイトゲンシュタインは、次のように述べる。

——たしかに、「なにかある意味で」は、そうだ。実際、君が言っていることで間違っているのは、「不思議なやり方」という表現だけなのだ。それ以外は正しい。この文が不思議に思えるのは、人がその文に対して、実際に使われているのではない別の言語ゲームを想像するときだけなのである。[...] (PU §19)

対話者が純粹な表現として提示したものは、再びウイトゲンシュタ

インによってそのあり方が問われるものとなる。対話者は、ウィトゲンシュタインのアナロジーから逃れるように、より「純粹な」表現に近づこうとするが、ウィトゲンシュタインは、対話者が本当に自分が考えていることをクリアにし、自己吟味をするためには、対話者の方法よりも自身が提示する「比較」の方法のほうが適切である、ということを示唆する。

対話者がより純粹な表現に近づこうとするとき、対話者は言葉数を減らし、その少ない言葉で何か特別なことを伝えようとする。例えば、「不思議な、やり方でその使い方そのものが、何かある意味で目の前にある」(PU §195)と言ったとき、「その使い方そのもの」という表現には、「ある語のすべての可能な用い方」という意味合いがこめられている。このことは、対話者にとっては、自身の考えを少しでも純粹に、不純物を排除し凝縮して表現することであるだろう。しかし、対話者が純粹な表現をしようとすればするほど、対話者の考えは、不明瞭になっていく。不明瞭になっていくというのは、対話者が考えていることが、他人にとって一段と理解しがたいものになっていくというだけではなく、実は対話者自身にとっても、自身がある表現を使って考えていることが見てとりづらくなっていくということである。

われわれは誰でも、ある言葉がどんな意味で使われているかを明確にするためには、特定の文脈を必要とする。文脈がなくなるとも、あ

る言葉がどんな意味で使われるかを枚挙することはできるかもしれないが、文脈がなければ、実際にある言葉がどんな意味で使われているかを明確にすることはできない。対話者のように、言葉数を減らし、少ない言葉で特別なことを伝えようとすることは、結果的に、対話者が自身の表現にこめた考えに対してクリアであるための文脈を削り取ってしまうことになる。

もし、ある表現で自分が考えていることを明らかにしたければ、選ばれた数少ない言葉が、他の選ばれなかった言葉とどのような関係にあるかを考えた方がよい。その言葉は、他のどんな言葉に似ていて、どんな言葉に置きかえ可能であるのかを検討するのである。

例えば、「その使い方そのもの」(PU §365) という表現を「機械ではなく機械の運動そのもの」という表現にパラフレーズし、両者を比較する。すると、比較する以前には見えていなかった、その表現がもつ意味合いが見えてくる。たとえば対話者は、「その使い方そのもの」という表現で、ある語がどのように用いられるかということとを、あたかも機械からまったたく独立に存在する機械の動きのように考えているのではないか、ということが示唆される。このように、これまで削られる一方であった言葉と言葉の関係を修復することで、対話者はほとんど「展望のきかない」(PU §122) 状態だった自身の考えを、少しずつ見てとることができるようになる。

対話者がアナロジーに気づいており、それに対する拒絶もアナロ

ジーに対する反応の一種だと考えれば、「噛み合わない対話」は決して治療の不成功や不毛さを意味するものではなくなる。それどころか、噛み合わない対話は、対話者がある表現を使って考えていることを見てとりやすくし、それをさらに吟味するための重要な契機なのである。

#### 四章、われわれ読者にとっての意義

これまで、われわれは『探究』の読者として、治療者ウィトゲンシュタインの促しと、対話者の反応とをできる限り公平に分析してきた。これにより、噛み合わない対話が治療の重要な一過程を示すものであることが説明された。最後に本章では、治療を観察する読者の視点から、噛み合わない対話の意義を検討したいと思う。

噛み合わない対話は治療の不毛さを示すのではなく、むしろ対話者がある表現を使って考えていることをクリアにするきっかけである、ということが正しいとしても、われわれにはまだ疑問点が残されているように見える。それは、もし対話者の態度が治療の過程を通じてほとんど変わらない場合、それでもまだ噛み合わない対話の積極的な意義をとなえることができるのか、という疑問である。つまり、仮にウィトゲンシュタインと対話者とのあいだで生じる衝突が治療の重要な一過程であるとしても、いずれはどこかで対話者の態度変更が期待されるのではないか、ということである。

この疑問はわれわれを、噛み合わない対話の治療の困難さを示すという当初の暫定的結論に、引き戻してしまうように見える。しかし、もしわれわれが、自身を『探究』の読者としてではなく、おのおの自身の問題を考える独立した人格だと思いつくならば、この疑問を違ったふうに見ることになる。すなわち、もしわれわれが、自身の考えをよりクリアにしたいと願うならば、われわれもまた同じ対話者と同様の困難にぶつかり、態度変更が期待される状況に立たされるのではないか、という疑問となる。つまり疑問は、ウィトゲンシュタインに対して問われるものではなく、われわれ自身に対して問われるものとなる。

もし疑問をわれわれ自身の態度変更に関する問題としてとらえるならば、「噛み合わない対話」は、われわれにとって一つの比較対象となる。もしわれわれが自身の考えをよりクリアに展望したいと願うならば、われわれはいつか、自身がものを考える際に拠りどころとしていくつかの重要な表現を、問い直す状況に置かれる。

その状況は、これまで吟味の対象ではなかったものを吟味するよう、態度変更を迫るものである。その時、われわれは対話者のように拒絶してしまうかもしれない。

しかしウィトゲンシュタインは、態度変更を少しでも容易にするヒントを、われわれに与えてくれたように見える。ウィトゲンシュタインは『探究』の中で、対話者に自身の表現を見直すきっかけを

提供し続ける。このことは、自身の表現を見直す機会が、たった一度しか訪れないのではなく、「自己吟味」(Cavell 1962, p. 71)の過程で幾度となく訪れることを意味する。よって、もしわれわれがウィトゲンシュタインの治療から学び、自己吟味を試みるならば、われわれは段階的に態度変更を遂げることができると予想される。われわれは、態度変更をするかしないかの決断に追い込まれるのではなく、自己吟味の過程で自然に姿勢を変えていくことができるのである。

「噛み合わない対話」がもつ、われわれ『探究』の読者にとっての意義は、われわれが自己吟味を行う当事者である場合に明らかとなる。われわれは、対話者の拒絶を理解することを通じて、自己吟味の難しさを知る。だが、ウィトゲンシュタインが促すように、われわれが自身の思考の拠りどころとする重要な表現を少しずつ他の言葉と比較していくならば、われわれは自然と、自身がある表現で何を考えていたかについてクリアになることができるだろう。

## 五章、結論

本稿の目的は、「噛み合わない対話をウィトゲンシュタインがわれわれに見せる理由は、何だろうか？」という問いに、対話者の反応を分析することを通じて回答することであった。われわれは、噛み合わない対話について、治療過程における二つの意義と、われわれ

れ『探究』の読者にとっての一つの積極的意義を挙げることができると。

第一に、噛み合わない対話は、ちょうど対話者が表現の明確化を被りつつある、ということの証左であり、治療が順調に進行していることを意味する。対話者は、ウィトゲンシュタインのアナロジーに拒絶の反応を示すが、その拒絶の反応は、自身の表現が明確化される中で生じそうな不都合を退けようとすることであり、対話者は明確化の営みの中にある。第二に、噛み合わない対話は、ウィトゲンシュタインと対話者のあいだで衝突が生じたとしても、それをきっかけに治療が継続するものであることを意味する。対話者がウィトゲンシュタインのアナロジーに抵抗して、より純粹に考えを表現しようとするとき、再びウィトゲンシュタインによってその表現が着目され吟味の対象となる。つまり噛み合わない対話は、次の明確化の契機となるのである。以上の二点を総合するならば、ウィトゲンシュタインが噛み合わない対話を描写した理由は、まじめな治療が拒絶を引き起こすものであること、そして拒絶を引き起こしてもなお継続するものであることを示すためだと言える。

次に、われわれ『探究』の読者にとっての意義は、噛み合わない対話が、われわれにとって一つの比較対象となる点にある。自身の思考の拠点となっていた言葉を吟味することは、これまでの態度の変更を必要とすることであり、対話者も拒絶したように、それほど

容易ではない。われわれも、対話者と同じ立場になれば、拒絶の反応を示すかもしれない。しかしウィトゲンシュタインは噛み合わない対話を描写するところ、われわれに態度変更が生ずるまで継続的な自己吟味を行っていくを奨励するのである。

#### 参考文献

- Baker, G. (2004), *Wittgenstein's Method: Neglected Aspects. Essays on Wittgenstein*, Blackwell.
- Ammereller, A. (2004), "Puzzles About Rule-Following PI 185-242", *Wittgenstein at Work: Method in the Philosophical Investigations*, Ammereller, E., & Fischer, E. (eds.), Routledge, pp. 127-46.
- Cavell, S. (1962), "The Availability of Wittgenstein's Later Philosophy", *Philosophical Review*, 71 (1), pp. 67-93.
- Diamond, C. (1989), "Rules: Looking in the Right Place", *Wittgenstein: Attention to Particulars*, Phillips, D. Z. & Winch, P. (eds.), Macmillan, pp. 12-34.
- Egan, D. (2011), "Pictures in Wittgenstein's Later Philosophy", *Philosophical Investigations*, 34 (1), pp. 55-76
- Finkelstein, D. H. (2000), "Wittgenstein on Rules and Platonism", *The New Wittgenstein*, Garry, A. & Read, R. (eds.), Routledge, pp. 83-100.
- Heal, J. (1995), "Wittgenstein and Dialogue", *Proceedings of the British Academy*, 85, pp. 63-83.
- Kuusela, O. (2008), *The Struggle Against Dogmatism: Wittgenstein*

*and the Concept of Philosophy*, Harvard University Press.

Minar, E. (2011), "The Life of the Sign: Rule-Following, Practice, and Agreement", *The Oxford Handbook of Wittgenstein*, Kuusela, O. & McGinn, M. (eds.), Oxford University Press.

Ohtani, H. (2016), "Wittgenstein on Context and Philosophical Pictures", *Synthese*, 193 (6), pp. 1795-816.

Rowe, M. W. (2007), "Wittgenstein, Plato, and the Historical Sociates", *Philosophy*, 82 (1), pp. 45-85.

Shanker, S. (2004), "A Picture Held Me Captive", *Wittgenstein at Work: Method in the Philosophical Investigations*, Ammereller, E. & Fischer, E. (eds.), Routledge, pp. 246-56.

Wittgenstein, L. (2009), *Bemerkungen ueber die Grundlagen der Mathematik*, Neuaufgabe, Suhrkamp.

—— (2009) *Philosophische Untersuchungen = Philosophical investigations*, translated by Anscombe, G. E. M., Hacker, P. M. S. and Schulte, J., Rev. 4th ed., Blackwell.

大谷 弘 (二〇一〇) 『ウィトゲンシュタインの哲学的方法』『哲学雑誌』二二五巻七九七号、一八三—二〇二頁。

—— (二〇一四) 『言語と規則に支配されているのか』『哲学』六五号、一三五—百五十頁。

G・W・ラングマン (一九八七) 『人間知性新論』米山 優訳、みすず書房。

#### 註

(一) 『探究』が出版されたのはウィトゲンシュタインの死後であるため、厳密に言えば『探究』はウィトゲンシュタインの著作ではなく遺稿で

ある。しかし生前、ワイトゲンシュタイン自身によって『探究』の出版が試みられたことを鑑み、ここでは「著者」という表現を用いることにした。

(2) 『探究』一八五―二四二節のいわゆる「規則遵守論」に関係する議論は、後期ワイトゲンシュタインに関する研究の中でも特に複雑化し多岐にわたっているため、ここでは「治療」の観点から当該箇所を検討する文献を紹介するにとどめる。先駆的な研究は、規則遵守論を、プラトニストと規約主義者の戦いとしてではなく、哲学の問題を問うているときにわれわれがやっていることの捉え直しとして読むべきだと宣言したDiamond (1989) である。このダイヤモンドのアイデアを発展させた研究にMinar (2011) がある。その他にも、『探究』と関係の深い中期ワイトゲンシュタインの遺稿『数学の基礎』の検討を通じて治療対象を考察するFloyd (1991) や、対話者が陥っている見方を検討するFinkelstein (2000) がある。また、P・ハッカーやH・J・グロックらによる標準的解釈の見直しを通じて、治療方法を明らかにする大谷(二〇一四)や、ワイトゲンシュタインの哲学的方法をめぐる議論に沿って、規則遵守論の解釈も行われるべきだと主張するAmmereller (2004) がある。

(まろの ちおり・千葉大学)

est in logic, however, this theory was scarcely dealt with in *Logical Investigations*. However, Husserl began to re-examine it when he planned his new systematic and comprehensive book in 1921. Therefore, the purpose of this paper is to explain how Husserl's theory of communication was developed since 1921. Because his plan for the new book was only partially realized, we use mainly manuscripts which were included in *Phenomenology of Intersubjectivity II* and *III*.

We will clarify the process of this development as follows. First, we will explore Husserl's manuscripts from 1921 and show that he regarded the 'body' and the 'open world' as the conditions of possibility to experience others. Second, we will examine further his manuscripts from 1924 and present his view that the experience of others can be classified into 'empathy' and 'communication'. In empathy, the mental acts of another are indicated without his/her intention, while they are indicated intentionally in communication. Husserl tried to characterize communication by intentional indication and the reception thereof. Finally, we will deal with the theory of community in *Cartesian Meditations* (1931) and manuscripts written in the 1930s. According to this theory, the community of empathy can proceed to the community of communication if members thereof indicate their wish to communicate intentionally and receive it from each other. Then, they satisfy the conditions of possibility to experience others in a higher order; they regard other bodies as bodies for intentional indication and live in the cultural and social world, which is open to the community of communication. We can therefore present this theory of community from the 1930s as a developed form of the theory of communication of *Logical Investigations*.

## Wittgenstein's Interactive Style: The Significance of Conflict with His Interlocutor

Saori MAKINO

Wittgenstein's *Philosophical Investigations* (hereafter PI) is known for its dialectic style. Wittgenstein, as a therapist, makes his interlocutor reflect on his own wording. Several studies have been conducted regarding Wittgenstein's interactive style. However, little attention has been given to a conflict between Wittgenstein and his interlocutor. They often talk past each other. Wittgenstein gets irritated at his interlocutor's reaction. The interlocutor complains that Wittgenstein's advice is irrelevant. The question why Wittgenstein describes the conflict in a positive way remains unanswered.

The key to solving the problem is to consider the interlocutor's perspec-

tive. I will answer the question through an examination of the interlocutor's reaction towards Wittgenstein's advice. First, I will examine in detail the therapy of PI §§191–195. In these sections, Wittgenstein not only points out that the interlocutor's expressions lack a concrete example and context in which we could use them, but also offers objects of comparison in which Wittgenstein makes his interlocutor reflect on his own wording. However, the interlocutor does not receive Wittgenstein's offering in a straightforward manner. Second, I will investigate the interlocutor's reaction in PI §195. I suggest that the interlocutor seems to realize the analogies between objects of comparison and his own expressions but refuses to admit such analogies are tenable. If my explanation is true, the question why Wittgenstein describes the conflict in a positive way can be answered.

Finally, I will reconsider the reason why Wittgenstein positively describes the conflict by focusing on the readers' point of view. I assert that Wittgenstein encourages us to scrutinize our foundations of thought.

### Being a responsible agent: Heidegger's insight into our moral responsibility

Hiroshi TAKAI

This study elucidates the argument which Martin Heidegger developed in his *Being and Time* (*Sein und Zeit*) about responsibility. His interest is focused on how far we have to take responsibility for our actions. To forecast this problem, one might think that, rationality or rational deliberation defines its scope. But Heidegger didn't think that "rationality" provides us a final solution to the problem about responsibility. Heidegger's evaluation is concerned with the famous distinction between authenticity and inauthenticity, so this study interprets Heidegger's argument about this distinction as one about responsibility.

Heidegger identifies inauthenticity with "the They" (*das Man*) as our everyday mode of being and analyses our concept of responsibility and our judgments about our actions in terms of this concept. Heidegger introduces the concept of "the They" as "the-one", who nobody is but everyone is. And according to Heidegger, "the They" defines what we have to do and what we must not do. So we can say that this concept represents the rationality in a society. Actually, we can blame someone, saying "one ordinarily doesn't do so" or "rational agent should do this." In doing so, we resort to "the They" or anonymous ratio-